東京 2020 オリンピック競技大会
スイス選手団事前キャンプ報告

髙橋美穂子*・戸村貴史**・古田映布**・清水　諭***

Report on the Swiss Team Pre-Camp for the Tokyo 2020 Olympic Games

TAKAHASHI Mihoko *, TOMURA Takafumi **, FURUTA Yu ** and SHIMIZU Satoshi ***

要旨

東京 2020 オリンピック競技大会（以下、東京 2020 大会）を前に、スイスオリンピック代表選手団（以下、スイス選手団）が 2021 年 7 月 14 日（水）から 8 月 2 日（月）の 3 週間に渡って、つくば市で事前キャンプを行った。本学では、マウンテンバイク、柔道、陸上競技の代表選手やコーチら 52 名が、オリンピック本番前の最終調整を行った。

東京 2020 大会は新型コロナウイルス感染症のために 1 年延期された末の開催だった。その影響は本学における事前キャンプにも波及し、本学関係者だけでなく、スイスチームにも感染者を一人も出さない「安心・安全な対応」が求められた。

本稿は、東京 2020 大会に関する賛否両論がある中で、事前キャンプをサポートした学生アテンドスタッフの体験に焦点を当てると共に、本学としてこのような国際的な事前キャンプを誘致することの意義について検討することを目的とした。

以下では、1. つくば市がスイス選手団の事前キャンプ地となった経緯に加えて、2. オリンピック・パラリンピック総合推進室（以下、OPOP）が同市と茨城県と連携しながら行った事前キャンプに向けた準備と、キャンプ中の対応について報告する。

1. 事前キャンプまでの経緯

2018 年 4 月のスイスオリンピック協会（以下、SOA）との合意書締結からの経緯は、表 1 の通りである。

＜表 1 ＞事前キャンプまでの経緯

2018	4月11日	スイスオリンピック協会（以下、SOA）、茨城県、つくば市、本学（以下、つくばサイド）の4者による事前キャンプ基本合意書の締結
2019	2月28日	つくば市が内閣官房にスイスのホストタウン申請を行い登録される。
	5 月	IAAF世界リレー2019横浜大会の陸上競技の事前キャンプ受入れ
	8 月	ITUワールドトライアスロン　オリンピック　クオリフィケーションイベントのトライアスロン事前キャンプ受入れ
2020	2月27日	東京2020大会の事前キャンプの実施に関する協定書の締結
2021	3 月	つくばサイドより体操競技の事前キャンプ中止の申出、SOA承諾
	5 月	SOAよりフェンシング事前キャンプ中止の申出、つくばサイド承諾
	6 月	SOAよりトライアスロン事前キャンプ中止の申出とマウンテンバイク受入れ要請、つくばサイド承諾

*　オリンピック・パラリンピック総合推進室
Office for the Promotion of Olympic and Paralympic Activities

**　筑波大学人間総合科学学術院　人間総合科学研究群　体育科学学位プログラム
Doctoral Program in Physical Education, Health and Sport Sciences, University of Tsukuba

***　筑波大学体育系
Faculty of Health and Sport Sciences, University of Tsukuba

2. 事前キャンプ

2－1. 概要

本学が事前キャンプで受入れたスイス選手団は52名で、表2の通りであった。

スイス選手団には、日本に入国後14日間の自宅等待機期間中の活動を可能とする日本政府による「アスリート用東京オリパラ準備トラック」（通称アスリートトラック）が適用されていた。このため、選手らは滞在先のホテルと、本学などの練習場所のみで行動しなければならないという行動制限が課され、毎日PCR検査を受検することになっていたが、入国翌日から本学施設で練習を始めることができた。

また、OPOP職員のほかに、スイス選手団受入れ時に対応してくれるアテンドスタッフとして学生を中心に募集し、最終的には30名が集まった。本学の人間総合科学学術院スポーツ国際開発学共同専攻（IDS）や、スポーツ・オリンピック学学位プログラム（TIAS2.0）の学生のほか、体育学学位プログラムの大学院学生、体育専門学群、国際総合学類の学群生などだった。練習施設に精通した人材として、陸上競技部、柔道部、体操部の学生にも参加してもらった。

スイス選手団の大半が入国前にワクチンを接種していたとはいえ、本学の一般学生、職員、アテンドスタッフとの間での感染防止が、今回の事前キャンプの至上命題であることに変わりなく、徹底した感染対策を講じる必要があった。

2－2. 事前キャンプに向けての準備

徹底した感染対策の指針となったのが、内閣官房の事前キャンプ受入れマニュアルに基づいて策定された「東京オリンピック・パラリンピック　スイス選手団　受入れマニュアル（事前合宿編）」（第1版、2021年6月28日）と、本学の学内ガイドライン（2021年4月8日、学長決定）であった。その中で、最も入念に行ったのが、スイス選手団と一般学生、職員が近距離での接触を避けるために、使用空間を分ける「ゾーニング」であった。

例えば、中央体育館トレーニング場については、キャンプ中、スイス選手団には専有場所として使ってもらった。体育館入口から2階にあるトレーニング場までの動線についても、一般学生の使用を禁じ、スイス選手団のみが使用する通路を確保した。下駄箱も一般学生との共有を避けるため、スイス選手団の使用は不可とした。

トイレについてもスイス選手団専有の場所を武道館内と陸上競技場近くの体育系サークル館内に設けた。駐車場もスイス選手団専有の場所を確保した上で、各練習場へ行くルートは固定し、アテンドスタッフが常に同行して、一般学生、職員と接近しないように配慮することとした。そのため、キャンプ開始前に一般学生向けに、ゾーニングを周知するためのポスターを掲示するなどした。

また、学内ループや陸上競技場を使用する際には、スイス選手団専有ではなかったため、いかに一般学生と近接しないようにそれぞれが使用できるのかについてシミュレーションをしながら検討し、アテンド体制を構築した。スイス選手団には、こうしたゾーニングやアテンド方法について入国前に知ってもらうため、動画を作成して共有した。入構後の現地における説明は、少しでも減らし、接触機会をなるべく作らないように対応した。

さらに、筑波大学附属病院感染管理部の看護師を講師として招いて感染対策講習会を実施し、本学のすべてのアテンドスタッフが受講した。感染者を出

＜表2＞受入れ競技や人数など

競技	受入れ人数	本学施設利用期間	練習場所
マウンテンバイク	計3名（選手1名、コーチ、整備士）	7月14日～7月18日	学内ループ道路、不動峠（筑波山）等
柔道	計10名（選手2名、補欠選手、練習相手、コーチ、トレーナー）	7月17日～7月21日	武道館（柔道場）、中央体育館トレーニング場、学内ループ道路
陸上競技	計37名（選手23名、コーチ、トレーナー）	7月21日～8月1日	陸上競技場、学内ループ道路、虹の広場（クロスカントリーコース）、中央体育館トレーニング場

・そのほかの受入れ（シェフ）2名

さないための感染防止対策の基本事項から、万が一、感染者が出てしまった際の消毒方法を学んだ。アテンドスタッフは事前に PCR 検査を受けて、陰性であることが業務に携わる前提条件になっていた。また、感染防止対策アプリ「COCOA」のダウンロードをしてもらった上で、陽性反応が出たり、濃厚接触者になった場合の対応をスムーズに行うために、日々の行動歴を業務開始 14 日前から記録してもらった。

業務期間中はスイス選手団との接触の度合いに応じて、毎日から 7 日に 1 回の割合で PCR 検査を受けることになっていた。また、スイス選手団との接触を極力避けるため、選手団やアテンドスタッフ同士で 2m 以内に近づかないこと、会話は必要最低限にすること、もしスイス選手団から何らかの要望があった場合は OPOP 職員に連絡し、対応をお願いすることとした。

感染対策に目が行きがちな事前キャンプではあったが、一方で暑さ対策、地震や負傷時などの緊急時の対応についても、準備を怠らなかった。例えば、陸上競技において、選手が暑さを凌いで休めるように、陸上競技場横の体育系サークル館 1 階の会議室を控室とした。競技場脇にある雨天走路も部分補修をするなどして整備し、スイス選手団が使用できるようにした。競技場に面した屋根付きのスタンドについては、その半分のスペースをスイス選手団専有とした。地震などの緊急事態が発生した時の避難経路についても、事前にリスク・安全管理課と協議し、決定した。

アスリートトラックで入国してきた選手らが負傷したときの対応については、筑波大学附属病院にお願いすることになった。スイス選手団に PCR 検査で陽性反応が出た際の対応については、筑波メディカルセンター病院と筑波大学附属病院、つくば保健所、つくば市、茨城県と協議を行い、対応フローを事前に作成した。こうしたフローなどについても、スイス選手団に入国前に周知した。

食材についても、スイスからはシェフ 2 人が来日して、基本的には、毎日、特定の食材提供会社を通じてホテルに運び込まれるようになっていたものの、必要な食材が出てきた場合は、アテンドスタッフと滞在先のホテルスタッフが連携して対応することになった。

2−3. 事前キャンプにおけるサポート

感染対策および、暑さ対策、緊急時の対応について準備した上で、実際にスイス選手団を受入れた。アテンドスタッフは事前の取り決めを遵守し、業務に従事してくれた。ただし、学内ガイドラインでは、選手と近距離で接する際は、「手袋をはめて、マスクにフェースシールドをする」と決められていたが、暑さのため、マスクのみの着用で対応することになった。事前に感染学の専門家にヒアリングし、「熱中症対策との兼ね合いで感染防止対策を実施する必要がある」という助言を受けていたことによる。

実際の各競技のアテンドにおいては、下記のように、柔軟な対応を求められることが多かった。

2−3−1. マウンテンバイク

マウンテンバイクの練習メニュー等は、前日の練習後に決まることがほとんどで、選手によると、「自分の体の調子を考慮して、次の日の練習メニューを決めたい」ということだった。

感染防止の観点から、練習場所は事前に内閣官房に感染対策を踏まえて申請しなければいけなかったため、毎日、選手とコーチ、OPOP 職員で話し合った。国際オリンピック委員会（IOC）が定めた感染対策について、選手もコーチも熟知していたため、建設的な話し合いの中で次の日の練習内容が決まった。

学内ループ（約 5 キロ）を 10 周したり、筑波山周辺を 3 時間以上走り続ける日もあったが、平均して 10 名のアテンドスタッフが無線と携帯電話で連携を取り、安全を確保しながら業務を遂行できた（写真 1）。

写真 1

マウンテンバイクの選手は 60 万人ものフォロワーがいる自身の SNS で、本学や周辺での練習状況を紹介し、最終日には、スタッフが見送る様子をアップロードして、感謝の気持ちを表してくれた。そして本番では、銀メダルに輝いた。マウンテンバイク受入れについてスイス側から申出があり、承諾したのが事前キャンプまで 1 ヶ月を切った 6 月だったにも関わらず、結果的には選手が思い描く練習を学内外で実現できたと推察できた。

2−3−2. 柔道

柔道チームについては、主に武道館2階の道場と学内ループ、中央体育館のトレーニング場を使用した（写真2）。道場については、本学柔道部と使用時間を分けて専有で使用してもらい、スイス選手団の使用前後に消毒作業を行った。

写真2

また、スイス選手間でのクラスター発生を防ぐため、練習中は冷房をきかせ、窓を開けて換気を徹底した。選手団による練習前後での消毒作業は、少ないときは4人のアテンドスタッフで行わなければいけなかった。畳全体を掃いた後で、消毒シートで拭いていく地道な作業は、冷房が効いているとはいえ、汗だくになった（写真3）。

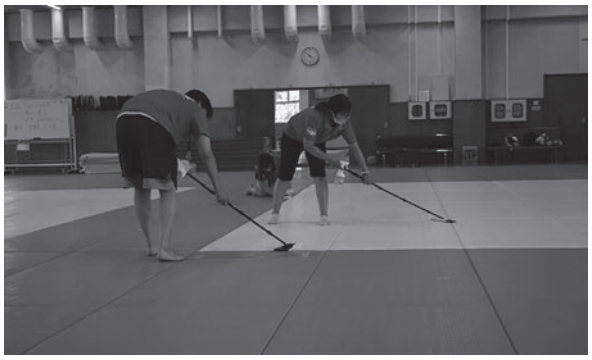

写真3

しかしながら、そうした作業を垣間見たスイス選手団からは多くの感謝の気持ちが伝えられた。選手の中には、本番で3位決定戦まで上り詰めた末に、最後は1本負けをしてしまった女子選手がおり、自身のSNSで、下記のようなメッセージを本学のアテンドスタッフに送ってくれた。

“a really good start but the end was a little bit disappointing. But we had a good preparation in tsukuba I would say.”

2−3−3. 陸上競技

陸上競技チームについては、陸上競技場を一般学生と共有で使う時間があった。このため、アテンドスタッフを毎回、競技場内の少なくとも4か所に配置し、無線で連絡を取りながら、スイス選手と学生が接触しないようにした。

具体的には、スイス選手団がレーンを使用する際には、声掛けをして、学生に場所を空けてもらった。陸上競技部の学生たちがスイス選手団の優先使用について共通認識を持ってくれていたおかげで、互いに接近することなく、キャンプを実施できた。

棒高跳びの選手もいたため、競技場内にある2箇所のピットを本学学生と使い分けた。高跳びの選手も跳躍練習の際には、着地するマットを学生が使用しているものとは別のものを使用してもらった。このほか、ハードルなどの練習器具についても、陸上部のものを借りた上で、学生とは別のものを使用した。

学内ループでの練習については、中長距離選手がいたため、アテンドスタッフは車や人との事故がないように最低でも2名が自転車で伴走した。コーチも自転車で伴走したため、スタッフは選手と2m以上の距離を取りながらではあったが、一般人への声掛けや、安全確認をしながらアテンドした。

選手以外のトレーナーやシェフについても、学内ループでのジョギングなど軽い運動をしたいという要望があった。調理の時間を踏まえて本学に来られるのは、早朝6時ということもあったが、この際もサポートすることができた。

最終日には、学生アテンドがスイス選手団と共に、陸上競技場で集合写真を撮り（写真4）、スイス選手団からはスタッフ全員に傘のプレゼントが送られた。

写真4

3. 学生スタッフの感想

下記はアテンドとして事前キャンプでサポートを行った学生による感想の一部である。事前キャンプ終了後に、任意で執筆してもらったものだが、感想からは学生がアテンド業務をする中で、自身の成長を感じることができ、また人のために尽くすことの尊さを体験した様子が伺えた。

3−1. 成長の実感

事前キャンプ業務に関わる中で、実感したという自身の成長について書かれた感想を紹介する。

人間総合科学研究群　博士前期課程体育学学位プログラム 1 年

私はこのスイスチームのアテンドという仕事をやり切ったことによってとても多くのものを得らえたように感じている。（中略）（今回の業務を）始める際には世界のトップ選手が来るのだからと、自分自身出来るだけのプロ意識をもって全力で取り組みたいと考え、全日程動けるようにし、普段切っているスマホの通知もつけ、英語の練習もし、最大限の準備をして臨むことが出来た。

実際に始まってみると、最初のマウンテンバイクの選手をアテンドする一週間は、なかなか自分自身がアテンド業務の中心となれず、もっと選手と話し、コース決めの際の話し合いに参加したいと思いつつも、自分の力不足を認め、コースの見張り役に徹していた。（中略）日程も後半になり、陸上選手が入ってきてからは主に選手がループを走るときの付き添いをする仕事のリーダーを任せてもらい、人員配置を考えたり、時には選手と走ったりと、非常に楽しく仕事をさせてもらった。選手ともコミュニケーションをとるなど非常に貴重な体験をさせていただいた。

私はこの 3 週間を通して、「報・連・相」の重要さや、どんな仕事もきちんとやっていれば重要な仕事を任せてもらえること、通常でないことが起こる現場で働く楽しさなど様々なことを身にしみて感じることが出来た。またオリンピック選手と深くかかわるという人生の中で二度とないような経験が出来たことが非常にうれしく、誇りに感じられる。

3−2. 生きがいへの気付き

ここでは、事前キャンプを通じて生きがいや将来の方向性を見いだした様子が書かれた感想を紹介する。

体育専門学群 3 年

私がアテンド業務を終えて感じたことは二つあります。一つは私にとって「スポーツを支える」ことが生きがいに繋がるということです。（中略）私はこれまでスポーツを「行う」ことと「見る」ことが大半でした。今回初めてオリンピックという大きなスポーツイベントにおいて「支える」という経験をしましたが、アテンド期間中は本当に毎日が楽しく充実していました。

選手の安全を確保し練習をサポートする、選手やコーチと英語でコミュニケーションを取り要望に応えるなど一つひとつの業務が新鮮でやりがいを感じられ、またそれをスイスチームに感謝されることで「やってよかったな」と幸せな気持ちになりました。選手は自身のトレーニングに集中できていたのではないかと思うので、選手とアテンドスタッフの間で win-win の関係性が構築できていたと思います。

二つ目は新たなオリンピックの価値を見出せたということです。私はアテンドを実施して、スイスチームの選手やコーチとの交流を通してスイスという国やそこに住む人たちに好意を持つようになり、オリンピックのいかなる競技でもスイスの選手を見つけると自然と応援していました。

このようにオリンピック（パラリンピックも同様）は今までは関心もなかった国と交流し、友好な関係を築くことができる機会を与えるというメリットもあると気づきました。

各地に様々な国の選手が事前キャンプを行ったと思います。その選手たちを歓迎するそれぞれの地域にとってはその国や選手と交流を深め、応援するということだけで東京 2020 大会が、かけがえのない思い出として刻まれていくのではないかと感じます。（中略）今回のアテンドを通してオリンピックに対する興味がより深まり、また「支える」活動にもっと携わっていきたいと強く感じました。このような経験ができたことに感謝し、この経験を一つのステップとして 3 年後のパリ 2024 大会やその他の競技大会にも貢献できるように、勉強や行動に励みたいと思います。

3−3. 英語力の向上、国際理解

下記では、キャンプのサポートを通じて語学力や国際理解を深められたという感想を紹介する。また、この学生は、大学入学当時からコロナ禍で他学

群の学生との交流が乏しかったといい、事前キャンプ業務によって本来の学生生活を取り戻せたように感じていたようだ。

体育専門学群 2 年

今回、アテンドスタッフとしてさまざまなことを経験できたことをとても誇りに思います。私は、スイスの柔道のオリンピック選手に会うことがとても楽しみでした。一方で、私は英語が好きですが、実践的に英語を使って働いた経験がなく、スイスチームの人たちとうまくコミュニケーションが取れるかとても不安でした。しかし、いざアテンド業務が始まると不安は吹き飛びました。他のアテンドスタッフと協力してコミュニケーションを取ったり、選手たちとも上手くコミュニケーションを取ることができて、とても充実したアテンド業務になりました。（中略）また、他の国の全く異なったバックグラウンドを持つ人たちとつながり、交流することが出来たことはとても幸運でした。

厳しいコロナ禍でのオリンピック開催には賛否両論ありましたが、私はこの業務に関われて良かったと思いました。私自身、柔道家であるということもあり、毎日暑い日も寒い日も全力で稽古をして力を付け、試合に出るということの大変さは理解しているつもりです。そのため、惜しくもオリンピック出場は果たせなかったけれども、練習相手として来日していた選手の方々が選手村に入ることができないことから、つくばでの事前キャンプを終えてスイスへ帰らないと行けないという状況がとても辛かったです。しかし、選手たちに、筑波大学での練習最終日に「また日本に来てください。今度は一緒に練習しましょう」と声をかけたところ、笑顔で応えてくれました。いつか、また選手たちと筑波大学の柔道場で再開し、次は一緒に練習できると思うと、とても楽しみです。

また、アテンドは私にとってもう一つ大きな意味がありました。それは、スタッフの人たちとの出会いです。私は、新型コロナウイルス感染症が拡大し始めた年に高校を卒業し、大学に入学したため、大学で授業を受けることはほとんどなく、新しい交友関係も築けないなど、大学生としての実感があまりわかないまま、この 1 年半を過ごしてきました。しかし、今回の経験を通してさまざまな部の人たちや、様々な所属の人たちに出会うことが出来、自分の知らない世界をたくさん知ることが出来ました。（中略）自分の将来に関しても、より深く考えるとてもいい機会になりました。

次の学生も、アテンド業務を通じて、語学力向上への意欲が増したようだ。

体育専門学群 4 年

アテンド業務を通して、語学力が向上できたとは決して言えません。実際に聞き取れないことや伝えることができなかったことが多々ありました。しかし、失敗を恐れずコミュニケーションをしていく姿勢は身につきました。これは、私が今まで行ってきた語学学習では学ぶことのできないものでした。これから生きていく中で英語を用いてコミュニケーションをする場面が必ずあります。その際、まずは伝えたいことをきれいな英語で伝えようとするのではなく、ジェスチャーを使ってでもなんとか伝えるというスタンスを大切にしたいと思います。今回の経験をきっかけに自分の語学力を磨きたいと思うようになりました。

3－4. オリンピック開催の意義

下記には、コロナ禍での事前キャンプだったために、通常とは違う対応が求められたことに対する苦労とともに、この業務に関わったことによる東京 2020 大会への見方の変化が記されている。見方の変化については、上記 3-3 の学生スタッフとも共通していた。

第三学群　国際総合学類 4 年

アテンドを終えて英語に自信がなく、また不安定な情勢や時間の制約でオリンピックのボランティアやバイトに応募する決心がつかずにいる中で、今回ゼミの先生が本業務を紹介してくださったのがきっかけで、スイスチームのアテンドに参加することになりました。実際参加してみて、当たり前ではありますが、ただでさえ選手たちは大きな大会前の最後の調整に来ており、フレキシブルな対応を求められるのに加えて、新型コロナウイルスの感染者を絶対出さないように、どんなに選手がたくさん走ろうが帯同したり、至る所を消毒したり、暑い中常にマスクを付けていなければならなかったり、コロナがあるからこそ気を遣わなければならない部分が多かったです。また、本来であれば選手と一緒に外出するなどしてコミュニケーションがもっと活発に取

れたであろう機会であったので、コロナが無い状態でこのような業務に携わりたかったと思う場面もしばしばありました。スイスの選手もそれは同じだったと思います。

でも選手がのびのび練習してくれている様子を見るのが何より誇らしく、つたない英語しか話せない私にたくさん「Thank you!」と声をかけてくださるのが何よりのやりがいでした。五輪開催に懐疑的な国民も多く、飲食店の営業時短や、多くのイベント中止があるのになぜオリンピックだけやるのかという批判の声もやまないなかでの五輪開催でしたが、私はアテンドに実際携わってオリンピックを開催した意義は大きいと思いました。多くの人が国内にいながら国際交流の場をもてたでしょうし、頑張ってオリンピックを成功させようという思いは日本のホスピタリティを通じて選手たちみんなに伝わっているというのを肌で感じたからです。

3−5. 東京 2020 大会への思い

下記では、自粛生活の中で関わることになった事前キャンプを通じて変化した東京 2020 大会への思いを紹介する。上記の感想文の随所にも含まれていたが、多くの学生スタッフが、キャンプを通じて、同大会について肯定的な思いを持つようになった。

人間総合科学研究群　体育学学位プログラム博士前期課程 1 年

今回、アテンドに興味を持ったきっかけは「オリンピックを自分の良い思い出にしたい」という理由からでした。新型コロナウイルスの影響で一年半近く自粛生活を余儀なくされており、このままではせっかく日本で開催されたオリンピックの思い出が、自粛生活そのものになり代わってしまうと考えていました。（中略）大会に向けて練習・調整していく選手の姿を見て、各国の選手の成果発表の場であり、なおかつ様々な種目が同時期に開催される唯一無二のオリンピックに関わることができてよかったな、と素直に思いました。感染対策に気を使いながらのアテンドでしたが、選手の方もフレンドリーで心が温まりました。

4. 本学で事前キャンプをしたスイス選手の東京 2020 大会での成績

マウンテンバイクでは男子選手が銀メダルを獲得し、柔道の女子選手は 3 位決定戦への進出を果たし、陸上競技女子 4 × 100m リレーや 4 × 400m リレーで、スイス記録を樹立するなどの活躍があった。表 3 では、本学で事前キャンプをした選手の出場競技、種目、成績について示した。

＜表 3 ＞本学で事前キャンプをしたスイス選手の成績

競技	種目	競技成績
マウンテンバイク	男子XCO	2位（記録：1:25:34）
柔道	女子52キロ級	3位決定戦敗退
	男子73キロ級	2回戦敗退
陸上競技（女子）	100m	予選5位（記録：10.95）NR 決勝6位入賞（記録：10.99）
	100m	予選22位（記録：11.25）
	200m	準決勝7位（記録：22.26）NR 決勝7位入賞（記録：22.30）
	800m	準決勝7位（記録：1:59.38）着順により敗退
	800m	予選35位（記録：2:03.00）
	100mハードル	予選33位（記録：13.17）
	400mハードル	予選33位（記録：57.03）
	棒高跳	予選20位（記録：4m40cm）
	棒高跳	予選24位（記録：4m25cm）
	走高跳	予選22位（記録：1m86cm）
	4×100mリレー	予選4位（記録：42.05）NR 決勝4位入賞（記録：42.08）
	4×400mリレー	予選12位（記録：3:25.90）NR
陸上競技（男子）	100m	予選40位（記録：10.28）
	200m	準決勝17位（記録：20.44）
	400m	準決勝14位（記録：45.26）
	5000m	予選24位（記録：13:43.52）
	10000m	決勝21位（記録：28:55.29）
	110mハードル	準決勝14位（記録：13.46）
	走高跳	予選23位（記録：2m21cm）

5. まとめ

新型コロナウイルスの感染防止対策をしながらの事前キャンプは、ほかの業務と同様に、前例を踏襲することのない新しい発想に基づいた対応が必要とされた。その中での暑さ対策も非常に難しく、スタッフの中には熱中症になってしまった者もいた。スイス選手団も日本の蒸し暑さに慣れるのに苦労している様子が伺えた。それにも関わらず、練習時以外はマスクを着用するなどの感染対策を疎かにせず、事前キャンプを乗り切ったことが、多くの選手が本番でのベストパフォーマンスにつながり、受入れ側において感染者を1人も出さなかったという安心・安全な受入れに繋がったといえる。

スイス選手団からは、事前キャンプ中に前向きなフィードバックがあっただけでなく、終了後も選手団の責任者であるPeter Haas氏から次のようなメッセージが届いたことから、本キャンプは成功だったと捉えられていると考えられた。

> “The time with you guys was really fantastic. Your hospitality, helpfulness and friendliness have impressed me very much. I still don't know how you managed the three weeks with us.（中略）
> Thank you again for everything you have given us and made! I will never forget Tsukuba!”
>
> “I have received only very positive feedback in analyses of Pre-camp!”

アテンドに従事した学生スタッフの感想文からは、肯定的な刺激をスイス選手団から受けていたことが明らかになった。学生は選手らと直接、多くのことを話せたわけではない。しかし、上記でも挙げたように、選手がSNSなどで全世界に発信したメッセージを通じても、感謝の気持ちを受け取ることができた。オンライン授業や課外活動が制限されたことで、思い描いていた大学生活とは異なる、ある意味、孤独な生活を強いられていた学生スタッフからは、久々に実地体験をしたことによる充実感や自身の成長を実感する様子が伺えた。

また、少しでも間近でスイス選手団と交流することができた経験が、次のオリンピック・パラリンピックに関わりたいという将来志向に繋がったことも明らかになった。このことから、今回の経験が、学生たちの将来に活かされ、本学と地域社会、ひいては日本や世界の発展のために、様々な形で還元してくれることが期待される。コロナ禍により賛否両論があるなかでの東京2020大会であったが、事前キャンプにおいては、教育的効果があったといえるだろう。

一方で、徹底した感染対策を講じていたとはいえ、スタッフ以外の学生や地域住民がスイス選手団と交流できなかったことは残念であった。オンライン合同記者会見において、選手の一人は「本来ならもっと住民と交流したり、つくば市内を散策してみたかった」と話していた。本学の学生や教員からも、「厳格な感染防止のため、スイス選手の練習を見ることすらできなかった」という声が聞かれた。コロナ禍であっても、感染対策をしながらのオンラインでの交流などは内閣官房の指針では認められていたので、それに準じた交流も検討してみる余地はあったといえる。

しかしながら、総じて、今回の事前キャンプは学生への教育的効果や、スイス選手団から一定の肯定的な評価を受けたことから、これまで以上にスイスとの関係が強化され、今後に活きる成果が得られた。本学にとって、継続的に国際キャンプ地としての機会を創出していくことで、国際スポーツの舞台で活躍する人材の育成・指導の拠点となることができよう。東京2020大会の開催を契機に、多くの卒業生を輩出してきた「つくば国際スポーツアカデミー（TIAS）」に加えて、以上のような経験を踏まえた国際キャンプ拠点形成など次のステップへの発展が期待される。

最後に、この国際拠点形成に際してのいくつかの課題を述べておく。第一に、国際スポーツシーンに対応する専属部署の整備である。今回はOPOPがその対応を一任されたが、業務を遂行していく中で、筑波大学附属病院をはじめ、体育センターや施設部、財務部、各運動部などの学内組織のほか、つくば市や茨城県、そして筑波メディカルセンター病院など学外組織との連携が欠かせなかった。コロナ禍という特殊事情を省いても、つくば市と茨城県とは2018年4月の事前キャンプ基本合意書の締結時から3年以上にわたる関係の継続が必要であった。国際スポーツシーンに関わるには、国際組織（今回でいえば、SOA）との連携は元より、こうした学内外組織と連携し、継承できる部署を設置する必要がある。

第二に、本学の教育・研究において国際舞台への人材の輩出をより日常的に意識し強化する必要がある。今回の事前キャンプで大いに活躍してくれたのは、普段から英語で授業を受け、留学生と交流のあったIDSやTIASの大学院生だった。こうした学生には、日常の生活において身についた国際的な感覚があったため、今回のような国際関連業務への適応がスムーズであったと推察できる。したがって、体育系において今以上にスポーツの国際舞台で活躍するための指導やサポートが可能な教職員を充

実させ、より多くの学生が、国際的な素養を自然に身につけられる教育・研究環境を整備する必要がある。